

旧制静高（人文社会科学部）の系譜を語る絵 学部長室に引き継がれ る曾宮一念作品

静大人文社会科学部学部長室に飾られる色彩豊かな一枚の油彩画。学部長室ということもあり、この絵の存在を知る人は限られる。作者は曾宮一念氏（一八九三〜一九九四）、日本近代洋画史上に名前を残す画家であり一九四五年から静岡県富士宮市に暮らした。同学部長の日詰一幸先生によると、これまでこの絵に関する情報を得る機会や、先代学部長からの引継ぎも無かったという。約一〇〇年前の一九二三年に描かれた絵、それがなぜそこに飾られているのか。曾宮氏と静大との関わりなどについて、美術家・静大名誉教授の白井嘉尚先生、また曾宮氏に詳しい常葉大教育学部准教授の堀切正人先生、そして曾宮氏の展示会を二回開催したフェルケール博物館学芸部長の椿原靖



左から、堀切先生、白井先生、日詰先生、椿原さん

弘さんを交え話を伺った。まず学部長室の絵が曾宮一念作であることを日詰先生に伝えたのは、一九九九年の静大創立五〇周年記念美術展を担当した白井先生だった。「一九八七年に静岡県立美術館で開かれた大規模な回顧展を見て曾宮一念の偉大さに気づきました。その時に静大蔵と紹介されていたのがこの

絵（風景）でした。その後、大学の美術展でお借りしたのです。白井先生によると曾宮氏は晩年失明し、以降は随筆を残した。その一つ『画家は廃業』（静岡新聞社）内に、一九二五年から旧制静高の美術教師を半年程務めた旨の記述がある。同年の二科展入賞を知った、当時の旧制静高校長から招かれたそうだ。「この作品はまだ画風が確立していない時期のもの。それをあえて、当時住んでいた東京から持ってきたようですから、曾宮さんなりに若者へ自分の迷いも見せるという教育的意図があったのではないかと想像します」と堀切先生。昨年フェルケール博物館の特別展「没後二五年 曾宮一念」を担当した椿原さんは「曾宮氏は全国的に評価されている作家。実際、特別展でそういった声もいただきました」という。一〇一歳で亡くなるまで明治〜平成を生きた点も曾宮氏を語る上で欠かせない。

「旧制静高時代から大変貴重なものをお預かりしているとわかりました。静大の歴史の長さを改めて感じられる作品ですね」と日詰先生。これを機に額に合わせキャプションがつけられる予定だ。今後一層大切に保管され、さらに永く引き継がれていくことだろう。

あなたの夢に、追い風を。



浜松いわた信用金庫